

機関番号：12601

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19320057

研究課題名 (和文) 中国語の構文及び文法範疇形成の歴史の変容と汎時的普遍性—中国語歴史文法の再構築—

研究課題名 (英文) Diachronic Changes and Panchronic Universal Properties of Constructions and Grammatical Categories in Chinese - a Reconstruction of Historical Chinese Grammar

研究代表者

木村 英樹 (KIMURA HIDEKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：20153207

研究成果の概要 (和文)：

本研究では、5名の研究者が、現代中国語に関する近年の理論的成果を踏まえつつ、上古から現代に至るまでの5つの時代の中国語における各種の文法範疇や文法構造の特徴を分析・考察し、共同討議を通して、各時代間の特徴の差異とそれを生み出すメカニズム、および、古今の中国語を通じて不易の普遍的特質と汎時代的に有効に機能する文法のおよび意味的パラメータを明らかにする。

研究成果の概要 (英文)：

In this study, five researchers, referring to recent theories of modern Chinese, examined and analyzed the characteristics of various grammatical categories and constructions of the Chinese language in five historical periods. Through analysis and discussion, we discovered differences in the characteristics of each period and the mechanisms which generated these differences. We also discovered universal features, as well as grammatical and semantic parameters, that have remained essentially unchanged throughout the development of the Chinese language from its ancient to its modern form.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2008年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2009年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2010年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
総計	14,300,000	4,290,000	18,590,000

研究分野：人文学 (中国語学)

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：歴史文法、ヴォイス、存在文、語順、疑問代名詞、上古中国語、中古中国語、近世中国語

1. 研究開始当初の背景

(1) 文法化(grammaticalization)に対する関心の高まりにつれて、中国語文法の歴史的研究が中国大陸を中心に近年活況を呈しつつある。ところが、従来の歴史的研究は、個別の表現形式の変化を追うことに終始した嫌いがあり、研究者個人による個別事象の記述や歴史の変遷に関する記述については着実な成果を挙げているものの、時代毎のさまざまな構文とそれらが織りなすパラダイムに対する総合的かつ体系的な解明が欠如しているために、個別事象を文法体系自体の動的変遷の上に位置づけることが大変困難になっている。言うまでもなく、個々の事象の変化は、文法体系の構造的変化の上に乗って立つものであり、その基盤の解明なしには十全な研究は為しえない。

(2) 現代中国語文法の研究は近年目覚しく深化し、数多くの理論的成果を挙げているが、近代以前の中国語を対象とする歴史文法の研究領域と現代中国語を対象とする文法研究の領域の間には、従来、積極的なインターフェイスが試みられることが少なく、現代中国語文法に関する理論的成果が歴史文法の研究に必ずしも十分な形では活かされてこなかった。ヴォイス研究を例に取れば、先秦・秦漢時代の上古中国語は、無標の受身構文がかなり普遍的に見られることも手伝って、ヴォイスは存在しないという見方が従来通説化している。類型論的に「主題優勢言語」(Topic Prominent Languages)とされる中国語においては、文法範疇としてのヴォイス自体に対する関心は概して薄く、特に歴史文法の領域においてはほとんど研究対象とはされてこなかったのが現状である。しかし、木村英樹の一連の研究(「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」『中国語学』247号、「北京語“給”字句拡張為被動句的語義動因」『漢語学報』2005年第2号など)では、形態変化に乏しい現代中国語においても整然とした有標ヴォイス体系が構造的に存在すること、また文法化の過程にヴォイスが深く関与していることなどが明らかにされており、それらの知見と成果は上代中国語をはじめ近代以前の中国語のヴォイス研究にも十分に活かし得ると考えられる。

(3) 本研究は、それぞれが専門とする時代領域において従来独自に文法事象の解明に取り組んできた5名の研究者が、共通の問題認識のもとに互いの知見を持ち寄り、各種の文法範疇や文法構造、さらには構文のパラダイムを、通時的かつ理論的な観点から比較対照することによって、中国語の歴史的研究を行なうために有効な枠組みの確立を目指そう

とするものであるが、中国語の歴史文法の領域においては、国内外を通じて、従来、このような研究形態による共同研究は存在せず、その意味でも、本研究はきわめて独創性に富み、中国語研究の分野にあっては、きわめて意義深いものと言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国語の歴史文法に関する従来の個別的・記述的成果を踏まえつつ、近年の現代中国語文法の理論的研究の成果を近代以前の中国語に積極的に適用することにより、上古から現代に至るまでの中国語の文法事象の歴史の変容(多様性)と汎時代的普遍性を究明することにある。

現代中国語に存在するさまざまな文法範疇や文法構造の意味のおよび形式的特質は、そのすべてがそれ以前の中国語に存在したわけではない。それらのうちのあるものは上古中国語の時代から現代まで汎時的に継承されているが、あるものは多様な変容を遂げて現在に至っている。本研究は、上古・中古・近世・近代・現代という5つの時代領域においてそれぞれ独自に文法事象の解明に取り組んできた5名の研究者が、「ヴォイス」「語順」「存在構文」など複数の主要テーマを柱として、近年の現代中国語の研究を通して得られた有益な知見と理論的成果を参照しつつ、各時代における様相を詳細に検討し、共通の問題認識のもとに互いの知見と成果を持ち寄り、共同討議を通して各時代間の差異とそれを生み出すメカニズムを明らかにしようとするものである。同時に、古今を通じて不易の中国語としての普遍的特質や、汎時代的に有効に機能している文法のおよび意味的範疇の存在を明らかにし、加えて、それらの範疇化を動機づける関与的なパラメータの究明を目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は(1)に示す役割分担と、(2)に示す作業内容を以って行われた。

(1) 役割分担

木村は中国語学のみならず、理論言語学、言語類型論、日本語学など隣接領域の関連先行研究を検討・分析し、それらの成果を取り入れつつ、ヴォイス範疇を機軸として現代中国語における各種構文の意味・構造についての理論的研究を行なった。さらに歴史文法研究との接点やインターフェイスの可能性を模索し、それによって得られた知見に基づいて、汎時代的に機能していると見られる文法のおよび意味的範疇に関して各分担者に対

して提言を行ない、統括的な立場での研究推進を図った。

大西は上古中国語（先秦から秦漢）、松江は中古中国語（後漢から隋唐）、玄は近代中国語（宋元明清）、木津は近世官話ならびに方言資料を主たる対象として、各時代の中国語における各種構文とヴォイス範疇についての記述的および理論的研究を行なった。木村の提言を参照しつつ検証を進めるほか、各研究者が専門とする時代の文法研究において蓄積してきた成果をさらに深め、異なる時代の研究者との意見交換と共同討議を行い、時代間の比較検討を行なった。調査対象とする文献については、伝世資料の他に、殷周の甲骨文・金文、戦国秦漢の竹簡・帛書、漢魏六朝の碑文や地券・トルファン文書、唐宋の敦煌文書、元代の元刊雜劇、古本老乞大、明清時代の官話課本など、同時代の資料を特に重視した。

(2) 作業内容

各研究者は、各種の文献、資料、言語コーパスの分析、さらにはインフォーマントを対象とする聞き取り調査などを通して得られたそれぞれの知見と成果を持ち寄り、定期的な共同討議や意見交換を通して、各時代の文法事象について、通時的かつ理論的な観点からの比較対照を行なった。

記述と考察の精密化を図るため、また、研究成果を積極的に海外に発信するため、各研究者は国内外の研究機関への出張や国際会議へ参加を積極的に行ない、国内外の研究者との学術交流を図った。

4. 研究成果

上古から現代に至るまでの中国語の各種の文法範疇や文法構造の意味的および形式的特質を、時代間の比較対照を通して明らかにし、所期の目的である「中国語の文法事象の歴史の変容（多様性）と汎時的普遍性の究明」につながる実証的または理論的成果を上げることができた。特に本研究の柱として重点的に進めてきた存在文、ヴォイス、語順については、下記の(1)(2)(3)(4)に示す顕著な成果を収め、中国語の歴史文法研究の分野に対して大きく貢献した。

(1) 上古期以来用いられてきた「“有”字存在文」（動詞“有”を述語として構成される存在文）を対象に史的対照研究を行い、用例の精査と綿密な理論的分析を通して、以下のような重要な知見を獲得した。

① 現代中国語に存在する「リアルな時空間における具象的な事物の存在」を表すタイプの“有”字存在文が上古期には未成熟であった。

② 『論語』に代表される上古前期の中国語においては、動詞“有”の表す基本的な意味は〈存在〉ではなく、〈所有〉であった。

③ リアルな時空間における事物存在を表す“有”字存在文の用法は、〈所有〉を表す用法から拡張したものであり、その萌芽は『史記』に代表される上古後期に見られ、中古期において発達する。

④ 上古中国語における「NP1+有+NP2」構文が外形的特徴をほとんど変えることなく所有構文から時空間存在構文へと拡張するという現象は、言語横断的に見ても極めて特異なものであり、HEINE『POSSESSION』に代表される従来の所有構文の文法化に関する研究が全く想定していないケースであることを明らかにし、言語類型論の分野に貴重な成果をもたらした。

⑤ 現代中国語の「時空間存在文」の意味的・構造的及び機能論的特徴を明らかにし、本構文を所有構文の一部として位置づけ、所在構文との対立を明確に特徴づけた。

(2) 歴史的に形態変化に著しく乏しい中国語にあっては、従来ヴォイスという文法範疇の存在が等閑視されてきたが、本研究では意味論的および構文論的な観点からヴォイスという現象を捉え直し、上古から現代に及ぶ範囲でヴォイス的現象を考察した。その結果、中国語においても、受身と使役の対立、間接使役と直接使役の対立、さらには対格構造と非対格構造の対立などが、上古から現代に至るまで、さまざまなかたちで明確な構造上の対立を伴って存在することが実証的かつ理論的に論証され、中国語の歴史的多様性と汎時的普遍性の一端が明らかにされた。

(3) 上古期から中古期にかけての疑問代名詞目的語の語順変化の現象に焦点を当て、7つの文献を対象とする悉皆調査に基づき、当該の変化が3つのタイプに分かれることを論証した上で、それらの変化を、上中古間に生じた複音節語の急増と機能語体系の崩壊という言語構造全体の変化に起因するものとして位置づけ、上中古期における疑問代名詞目的語の語順変化のメカニズムの一端を明らかにした。

(4) 上古中国語の否定文における代名詞目的語の動詞前置と動詞後置の現象について考察し、前置か後置かの語順を決定する要因として「非現実性」「有界—無界」という機能概念が関わっていることを明らかにした。

上記の成果は、いずれも論文、著書あるいはシンポジウムでの報告を通して公表され、とりわけ存在文に関しては、2009年の日本中国語学会全国大会において、本研究の研究代

表者である木村、研究分担者である木津、大西の計3名が招待講演者として招かれ、シンポジウム「存在表現の類型と歴史」が開かれるなど、本課題の成果が国内の学界においても高く評価されている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 25 件)

- ① 木村英樹、「存在文」が表す〈存在〉の意味および「定不定」の問題、『漢語与漢語教学研究』第2号、pp. 1-12、2011年、査読有
- ② 大西克也、古漢語“來”類動詞詞彙使役句和句法使役句的語義差異、『中国語言学』第4巻、pp. 73-89、2011年、査読有
- ③ 玄幸子、『老乞大』諸資料における中国語“有”字文の諸相 — “一壁有者”再考、『関西大学 外国語学部紀要』第4号、pp. 91-106、2011年、査読無
- ④ 松江崇、略談《六度集經》語言的口語性——以疑問代詞系統為例、『台日学者論經典詮釋中的語言分析』第1巻、pp. 129-166、2010年、査読無
- ⑤ 木津祐子、唐通事の「官話」受容—もう一つの「訓読」—、『続訓読論—東アジア漢文世界の形成』(勉誠出版)、pp. 260-291、2010年、査読無
- ⑥ 大西克也、上古漢語“使”字使役句的語法化過程、『何樂士紀念文集』、pp. 11-28、2009年、査読無
- ⑦ 大西克也、再論上古漢語中的“可”和“可以”—古漢語的語態試探之二—、『中国語言学』第1巻、pp. 149-165、2009年、査読有
- ⑧ 松江崇、也談早期漢訳佛典語言在上中古間語法史上的價值、『漢語史學報』第8輯、2009年、pp. 114-133、2009年、査読有
- ⑨ 木村英樹、中国語疑問詞の意味機能——屬性記述と個体指定、『日中言語研究と日本語教育』第1巻、pp. 12-24、2008年、査読有
- ⑩ 玄幸子、李氏朝鮮期中国語会話テキスト『朴通事』に見られる存在文について、『外国語教育研究』第14号、pp. 1-12、2007年、査読無

[学会発表] (計 23 件)

- ① 大西克也、説“生”——上古漢語動詞“生”の語義及句法特点、中国語言学發展之路——繼承、開拓、創新、國際學術シンポジウム(中国・北京大学)、2010年8月29日
- ② 大西克也、從“領有”到“空間存在”——上古漢語“有”字句的發展過程、第七屆國際古漢語語法研討會招待講演(フラ

ンス・ロスコフ海洋生物研究センター)、2010年9月19日

- ③ 玄幸子、UCB所蔵『訓鷹備考』所収「語録解」について、日本中国語学会第60回全国大会(神奈川大学)、2010年11月14日
- ④ 木津祐子、作為「規範」的通俗—從清代東亞漢文圈的「通事書」談起、「東亞文化意象之形塑—第十一至十七世紀間中日韓三地的文化互動」系列演講(台灣・中央研究院歷史語言研究所)、2010年10月25日
- ⑤ 松江崇、淺談揚雄《方言》中的語言層次問題——以“江淮”方言為例——、首屆中国地理言語学・中日方言保存利用國際學術研討會(中国・北京西郊賓館)、2010年11月22日
- ⑥ 木村英樹、現代中国語における存在表現の諸相と「時空間存在文」の特性、日本中国語学会第59回全国大会(北海道大学)、2009年10月24日
- ⑦ 大西克也、所有から存在へ——上古中国語における「有」の拡張——、日本中国語学会第59回全国大会(北海道大学)、2009年10月24日
- ⑧ 木津祐子、「有」が担う存在とは——『朱子語類』が示す知識と存在』、日本中国語学会第59回全国大会(北海道大学)、2009年10月24日
- ⑨ 玄幸子、唐代“有字存在文”分析、漢語歷史詞彙与語義演變學術研討會(中国・杭州)、2008年8月25日
- ⑩ 大西克也、再論上古漢語中的“可”和“可以”、第6回国際古漢語語法研討會(中国・陝西師範大学)、2007年8月14日

[図書] (計 5 件)

- ① 興膳宏、木津祐子、齋藤希史、汲古書院、『『朱子語類』訳注 巻10-11』、2009年、総340
- ② 松江崇、好文出版、『古漢語疑問賓語詞序變化機制研究』、2010年、総288
- ③ 大西克也、宮本徹、岩月純一、福井玲、陳力衛、放送大学教育振興會、『アジアの漢字文化』、2009年、pp. 1-180
- ④ 岩田礼、村之上伸、木津祐子、松江崇、白帝社、『漢語方言解釈地図』、2009年、pp. 60-69(松江)、114-121(木津)
- ⑤ 生越直樹、木村英樹、鷲尾龍一、くろしお出版、『ヴォイスの対照研究——東アジア諸語からの視点』、2008年、pp. 1-20およびpp. 65-107

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 英樹 (KIMURA HIDEKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20153207

(2) 研究分担者

玄 幸子 (GEN YUKIKO)

関西大学・外国語教育機構・教授

研究者番号：00282963

木津 祐子 (KIZU YUKO)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90242990

大西 克也 (ONISHI KATSUYA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：10272452

松江 崇 (MATSUE TAKASHI)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授